

numbers recorded here are basically agreed with that reported by Abbas and Godward<sup>2)</sup>, but differ from that by Hawlitschka<sup>1)</sup>. This difference in chromosome number indicates that her materials may belong to another species in this genus. Table 1 gives a list of chromosome numbers in *Tribonema*.

This work was carried out under the leadership of Prof. Munenao Kurogi, Hokkaido University, to whom the author has pleasure in expressing his indebtedness.

#### Literature cited

- 1) Hawlitschka, E., 1932. Pflanzenforschung, H. 15. Jena. 2) Abbas, A. and M. B. E. Godward, 1964. Phycos 2: 49-51. 3) Miller, J. D. A. and G. E. Fogg, 1957. Arch. Mikrobiol. 28: 1-17. 4) Godward, M. B. E., 1948. Nature 161: 203.

\* \* \* \*

北海道産のトリボネマ属植物 4 種, *Tribonema bombycinum*, *T. vulgare*, *T. minus*, *T. aequale* の染色体を観察した。今回調べた上記 4 種の染色体数はいずれも 17 であった。

#### ○帰化植物おぼえがき (2)\* (伊藤浩司) Koji Ito: Notes on some naturalized plants (2)

5. マンテマモドキ (ホザキマンテマ) *Silene dichotoma* Ehrh. 北海道での最初の採集地は 1938 年 7 月平賀仙次郎氏が十勝国川西村十勝農学校 (現十勝農業高等学校) 附近で、宮部先生が“フタマタマンテマ”の和名を手記された (水島: 植研 42: 229. 1967)。第二の採集地は、水島博士によると (植研 35: 157. 1960) 天塩国下川町である。最近日高国沙流郡門別町門別から、高橋諠氏が本植物を採集された。すなわち、北海道では第三の採集地となる。

6. ハナダイコン (ハナスズシロ) *Hesperis matronalis* L. この植物をめぐって、かって朝日新聞の投書欄が賑わったことがあったが、故川代善一氏は 1965 年北見国東相内村路傍で採集している。

7. エサシソウ (江差草) について What is “Esashi-sô” (*Verbascum album* Sugawara)? 故菅原繁藏氏の“北海道植物銘鑑”と題する小冊子は、道内の小中学校の先生方がよく引用する植物名の案内書であるが、その中に“エサシソウ”なる植物名があり、その正体についてしばしば質問を受ける。桑原義晴氏が嘗て北陸の植物 13: 46 & 48. 1964) でシロバナモウズイカ *Verbascum nigrum* L. var. *album*

\* (1) 植物研究雑誌 40: 219 (1965)

Sugawara としたがこれがエサシソウだとすると、その標本では花色は淡紫色または白、小花柄の長さは萼片の 2~3 倍あって、1.5~1.8 mm ある。したがって、小花柄の短かい *V. nigrum* よりは、*V. blattaria* L. か *V. phoeniceum* L. のグループに入る。葉の下面は全く無毛である点や葯の特徴から推して、エサシソウは結局シロバナモズイカであり、その正しい学名は *V. blattaria* L. forma *erubescens* Brügger となる。この植物は以前から北大農学部標本庫では *V. phoeniceum* L. のカヴァーの下に収められている。北海道では桧山~後志の日本海沿岸地域に分布しているようであり、後志地方の植物に詳しい平田克己氏の話では、既に 40 年以前から余市地方にみられたという。帰化の経路は明らかでない。 (北大農学部応用植物学教室)

□杉本つとむ編著：本草綱目啓蒙，本文・研究・索引 pp. 10+864+114，早稲田大学出版部，東京 (1974, I) ¥16,000。これは小野蘭山の本草綱目啓蒙の覆刻版であり、かつまた総索引である。早大図書館の初版本を底本にして各項に二丁ずつを写真にとって収めた。約四分の一にちぎまったが印刷は鮮明であり、よく読むことができる。48 巻 27 冊を全部影印にとったので大冊になったが、全体の 1/2 は植物であるから、この複製の完成は植物学にとって大変貴重であった。原本の出版は次のとおりである。

初版 享和 3 (1803)―文化 3 (1806) 48 巻 27 冊

再版 文化 8 (1811)―文政 12 (1815) "

三版 天保 15 (1844)―35 巻 36 冊 (重修と添記)

四版 弘化 4 (1847)―48 巻 20 冊 (重訂と添記)

啓蒙の内容についてはそれが本草綱目の説明では全くなく、蘭山が広く日本中から資料を得て、それをたゞ綱目の順に並べたといつてよいものであることは勿論であるが、同時に極めて多くの異名、方言を引用することでも有名である。従つてその総索引ができれば学界を裨益すること莫大であるとされていた。今回の複製の主目的もそれにあつたと思われる。その方言が各項目のトップに羅列されるのみでなく、本文中にも数多く散見する。“本文説明部分に示されている方言・古語・外来語などに限りすべて収載した”とある本書の凡例をみて、これが達せられたと知った時は嬉しかった。ところが偶然説明文中に石鹼の条下にサボテンが出ているが、そのサボテンが索引にないのである。それが動機で二三当ってみると大分むらがあつて、たとえばイカでは 38 中 9 なし、タケでは 44 中 25 なし、クスタケでは 10 中 5 なくナスビでは 8 中 6 も索引にでてこないのである。これは痛い。各項目とそのトップの方言は誤りなくでて来るから本文中の方言は解釈によって省略が行われたとみるが、できれば全部拾つて欲しかったと思うのは私一人ではあるまい。この方言については著者も論じている (pp. 791-810)。その他蘭山の小伝記、年表、関係書誌の写真などをのせている。

(前川文夫)